

7 その他全般的事項

<生命医科学研究科>

(1) 設置計画変更事項等

届出時の計画	変更内容・状況、今後の見通しなど
該当なし	

- (注) ・ 1～6の項目に記入した事項以外で、設置認可時の計画より変更のあったもの(未実施を含む。)及び法令適合性に関して生じた留意すべき事項について記入してください。
- ・ 届出書の「設置の趣旨等を記載した書類」の項目に沿って作成し、それ以外の事柄については適宜項目を設けてください。(記入例参照)
 - ・ 「事前伺い」により設置された学部等については、当該項目を記載する必要はありません。

(2) 教員の資質の維持向上の方策(FD活動含む)

① 実施体制

a 委員会の設置状況

生命医科学研究科では、平成20年の生命医科学研究科開設と同時に生命医科学研究科FD委員会規程(別紙参照)を制定しFDを組織的に推進するため、生命医科学研究科FD委員会を立ち上げている。再編後もこの委員会を継続して設置している。FD委員会は、研究科長と各専攻選出の専攻主任で構成する。なお、同志社大学では、学習支援・教育開発センターを中心にFDについても全学的な見地から教育活動の改善・推進にあっている。

b 委員会の開催状況(教員の参加状況含む)

生命医科学部FD委員会と合同で開催している。平成24年度の開催回数は2回である。両委員会委員・事務長計7名、構成員全員の参加であった。平成25年度も学部FD委員会と合同で2回程度開催予定である。

c 委員会の審議事項等

FD委員会は、生命医科学研究科におけるFDを組織的に推進するため、次に掲げる事項について審議する。

- (1) FDの基本方針の策定に関する事項
- (2) 教員の教授方法の開発及び改善に関する事項
- (3) FDに係る研修会及び講習会の開催に関する事項
- (4) FDに係る調査及び研究に関する事項
- (5) 学生による授業評価についての企画、立案、実施、結果の分析等及びそのフィードバックに関する事項
- (6) 生命医科学研究科内におけるFDに関連する諸活動の支援と調整
- (7) その他FDに関する事項でFD委員会が必要と認めた事項

② 実施状況

a 実施内容

本研究科は昨年度に再編したが、関連するFD活動は再編前の研究科においても実施している。昨年度は生命医科学部FD委員会との共催で専任教員のためのFD研修会を開催した。

b 実施方法

1. 専任教員のためのFD研修会

平成24年11月21日に生命医科学部・生命医科学研究科合同のFD研修会を開催した。本学カウンセリングセンターの車戸明子、岩田津貴子、大西見也子各カウンセラーから学生相談の現状について説明を受けた。

2. 「教員ガイドブック」の改訂

平成24年度に作成した「生命医科学部・生命医科学研究科教員ガイドブック」を改訂した。このガイドブックには、研究科教員の教育・研究活動に関連するさまざまな業務について、学内規程、手続き等の資料を冊子としてまとめている。

3. 研究シーズの創生

各教員の研究課題や、博士後期課程学生の研究進行状況に関する中間発表会を適時開催し、研究科全体としての研究課題情報の共有を図ると同時に、学生の研究指導に対してもチームワークによる指導体制の確立に努めることを通じて教員の自己啓発を促す。

これに伴い、研究科全体の総合的な運営は活性化すると考えられる。さらにこのような複眼的な研究指導の活用は学生の知的好奇心を喚起し、学修の動機付けに役立つとともに、教育の質の向上を図ることになる。

c 開催状況（教員の参加状況含む）

1. 専任教員のためのFD研修会

昨今、本研究科でも心に悩みを抱えているのではないかとと思われる学生が増えており、対応に苦慮するケースも発生している。そこで、本学カウンセリングセンターの3名のカウンセラーを講師に迎えて、FD研修会を開催した。

研修会では、まずカウンセリングの基本とカウンセラーのものの見方を学び、続いて最近のトピックスである不登校の問題、うつについて、不本意入学の問題、発達障害についての説明があった。

説明終了後には、教員が今まで経験した事例に基づいて、活発に質問を行い、有意義な研修会であった。

d 実施結果を踏まえた授業改善への取組状況

FD研修会で得られた知見を基に、日常での研究室での学生間、教員と学生間のコミュニケーションを活発に図り、教員が学生に対して、研究に関する問題点を適切にアドバイスできる環境整備に努めている。コミュニケーションを図り、引きこもり、うつ病などの早期発見を図るとともに、他の教科担当教員とも意見交換を行うことで、早期対応を心掛けている。学科会議・研究科委員会を通じて研究科全体としての研究課題情報の共有を図るとともに、学生の研究指導に対してもチームワークによる指導体制の確立に努めることの重要性を再認識することができた。

③ 学生に対する授業評価アンケートの実施状況

a 実施の有無及び実施時期

各学期末に実施する。

b 教員や学生への公開状況、方法等

生命医科学研究科ホームページ上に公表する。

(注)・「①a 委員会の設置状況」には、関係規程等を転載又は添付すること。

「②実施状況」には、実施されている取組を全て記載すること。（記入例参照）

・「事前伺い」により設置された学部等については、当該項目を記載する必要はありません。

(3) 自己点検・評価等に関する事項

① 設置の趣旨・目的の達成状況に関する総括評価・所見

平成23年度は本研究科学生の基礎となる生命医科学部の完成年度であった。そのため、生命医科学部では、設置の趣旨・目的である医学と工学の連携を軸とした現代的「医」の創出を目指し、各学科とも導入教育から専門教育までの全ての設置科目を開講し学部教育の完成を目指した。

本研究科の設置の趣旨は生命医科学部の連携部分も多くほとんどの教員が学部教員も兼ねているため、研究科からの視点からも、趣旨・目的について検討を行った。特に、4年次配当科目の「卒業研究」はそれぞれの学科カリキュラムの集大成であり、また研究科科目である「研究実験」に繋がるものであるため、これらの指導方法については各教員それぞれの視点からの検討が行われた。

これらの検討には、平成22年度のFD研修会テーマである「研究室の運営」が大いに参考になった。すなわち、「卒業研究」においては、各研究室においてそれぞれの専門性の高い研究課題を素材として学生指導が展開されると同時に、これを通じて研究室のさまざまな活動にも学生が積極的に関わるように留意し、教員と学生間の双方向の関わり合いを重視しながら各研究課題に対する理解を深かめさせることができた。さらに、学生自身が各自の将来の進路についてより深い意識を持つようにキャリアデザインに関する指導も併せて行われた。

従って、生命医科学部においては、設置の趣旨等で設定したカリキュラムをほぼ計画通りに遂行できたと考えられる。

博士課程前期課程では、医工学・医情報学専攻で、生命科学を中心とした医工学並びに医情報学の知識や技術について、生体情報の正確な計測と生体機能の工学的具現化に関する研究をとおして、工学と医学を基盤にした総合的な研究能力を身に付けて、医療技術産業のみならず幅広い産業分野でその基幹を支えて活躍できる中核的技術者の養成を目的として掲げた。また、医生命システム専攻は、生命科学を中心とした医科学の知識や技術について、生命維持の機能とヒト疾患の発病機構に関する研究をとおして、工学と医学を基盤にした総合的な研究能力を身に付けて、創薬や食品を中心とした健康医療分野並びにその周辺医療技術分野産業の高度化に貢献できる専門科学者の養成を目的としている。

博士課程後期課程では、医工学・医情報学専攻で、生命科学を中心とした医工学並びに医情報学の知識や技術について、関連する諸研究への能動的な参画をとおして、知識と技術を質的量的ともに深め、工学技術を的確に医療技術へと展開できる能力を身に付けて、基幹産業分野で次世代を先導する技術者として、あるいは大学や各種研究機関において、わが国の高度医療技術研究を先導し、国際的に高く評価される研究者の養成を目的としている。併せて医生命システム専攻は、生命科学を中心とした医科学の知識や技術について、関連する諸研究への能動的な参画をとおして、知識と技術を質的量的ともに深め、高度な生命医科学知識を高度医療へ展開できる能力を身に付けて、大学や公的研究機関あるいは医療技術関連企業において、わが国の高度医療技術研究を先導し、国際的に高く評価される科学者・研究者の養成を目的とした。

今年度の科目の開講状況について、廃止科目はない。また、客員教授等の招聘がないため未開講となった科目は、各専門分野の最新のトピックス等について受講できる特別講義であり、教育課程の内容としては十分な科目を設置していると認識している。なお、客員教授等の招聘については今後も積極的な働きかけを行っていく。

本研究科において、医工学・医情報学専攻及び医生命システム専攻に必要な施設・設備を平成20年度の研究科設置時に検討し、建物・研究装置等は既に準備している。

また、学生の教育へ資するために生命医科学関連の専門図書、教科書、一般書も既に平成20年の研究科開設時に整備済みである。その後も、機能的な教育・研究が実践されるため、施設・設備・図書の整備は継続して続けている。

本研究科では、人材養成の目的である「複雑な生命現象の本質を正しく科学的に理解すると同時に、その制御機構を多角的な視点から明らかにすること」のできる素養を有する者を選抜の対象とした。すなわち、博士課程（前期課程）においては、生命に関連する幅広い分野を対象とし、医工学ならび並びに医科学に関する高度な知識と技術を有し、それらを自ら運用することによって課題解決し、国際的なレベルでの社会貢献ができる素養を有する入学者の対象としている。

入学者に求める具体的な素養としては、

1. 工学と医学を基盤とした総合的な知識と技術の体系的な習得
 2. 課題解決のための論理的で柔軟な思考能力
 3. 英語によるコミュニケーション能力
- が挙げられる。

また、博士課程（後期課程）においては、生命の本質を正しく理解できるとともに、医工学ならびに医科学に関する先端的な研究を独創的な視点から推進できる能力を有し、その研究によって得た成果を国際的にも高いレベルで自ら運用して社会に還元できる素養を有する入学者を対象としている。入学者に求める具体的な素養としては、

1. 医工学ならびに医科学に関する先端的な知識と技術の運用
 2. 先端的な研究を推進するための論理的かつ柔軟な思考能力
 3. 国際的な社会貢献を目指した先端的な情報の発信能力
- が挙げられる。

本研究科前期課程の入学生の出身母体は本学生命医科学部、後期課程の入学生の出身母体は本研究科前期課程であり、ともにその設置の目的・趣旨の方向性は共有されていることから、平成24年度に引続き、平成25年度においても、上記の目的に沿った素養を有する学生を確保できた。また、海外からの留学生も入学したため、日本人学生に対しても留学生との交流を通じたコミュニケーション能力の向上や幅広い思考能力の涵養にも良い刺激となっている。

平成24年度から本研究科の入学生は生命医科学部出身者が大半となったため、本研究科でも設置したカリキュラムに対する自己点検は継続的に行っていく必要があると考えられる。また、これらの自己点検を行うことによってよりよいカリキュラム実現に向けた体制の準備も必要になると考えられる。また、学生のキャリア形成に必須である各自の頭で考えることを重視し、後期課程進学や就職についてもキャリアパスを考える機会の増加に努め、学生の意識を向上させることも必要になると考えられる。

② 自己点検・評価報告書

自己点検・自己評価委員会を設置し、単年度ごとの教育・研究活動を点検・評価し、報告書を作成した。

a 公表（予定）時期

自己点検評価報告書は、大学全体の自己点検・評価報告書に盛り込み、平成25年4月に公表した。

b 公表方法

自己点検・評価報告書を大学のホームページ上に公表した。

③ 認証評価を受ける計画

平成24年度に大学全体として自己点検・評価を行った。平成25年度に（財）大学基準協会の認証評価を受けている。

(注) ・ 届出時の計画の変更（又は未実施）の有無に関わらず記入してください。

また、「① 設置の趣旨・目的の達成状況に関する総括評価・所見」については、できるだけ具体的な根拠を含めて記入してください。

なお、「② 自己点検・評価報告書」については、当該調査対象の組織に関する評価内容を含む報告書について記入してください。

・ 「事前伺い」により設置された学部等については、当該項目を記載する必要はありません。

(4) 情報公表に関する事項

○ 設置計画履行状況報告書

a ホームページに公表の有無 (有 無)

b 公表時期（未公表の場合は予定時期） (平成25年 10月 1日)